

日本医史学雑誌 第65巻 第1号

目 次

原 著

- 明治期の大阪における産婆制度の変遷…………… 阿部奈緒美 3
華岡青洲の「青洲医談」に関する研究
——諸写本の書誌, 成立, 内容, 異名同書についての考察——…………… 松木 明知 19
村井椿寿(琴山)と吉益東洞…………… 松崎 範子 43
1887-90年『順天堂医事研究会報告』における集团的技術評価と医療情報の普及・共有
——コカイン局所麻酔を事例として——…………… 月澤美代子 67

研究ノート

- 華岡青洲の乳癌手術における再発例についての考察…………… 松木 明知 85

資 料

- 吉雄永純と合田大介の『紅毛外科聞書』の解題と翻刻…………… 板野 俊文 95
林洞海・つる晩年の手紙 神内家関連文書より…………… 須永 忠, 神内 國榮 109
池田文書の研究(60)…………… 池田文書研究会 127

記 事

- 例会記録…………… 137

例会抄録

- あの闘争とはなんだったのか——ぼくの場合——…………… 岡田 靖雄 137
医史学漫遊雑記
——平成28年度 海上自衛隊 遠洋練習航海 随行録——…………… 柳川 鍊平 139

書 評

- 見城悌治著『留学生は近代日本で何を学んだのか
——医療・園芸・デザイン・師範——』…………… 渡部 幹夫 140
青木歳幸・大島明秀・W・ミヒェル編『天然痘との闘い——九州の種痘——』
…………… 鈴木 友和 142
津谷喜一郎・長澤道行著『医療にみる伝統と近代——生きている伝統医学——』
…………… 浦山 きか 144

書籍紹介

- 大森弘喜著『フランス公衆衛生史——19世紀パリの疫病と住環境——』
…………… 渡部 幹夫 145
Florence Nightingale 著 “Notes on Nursing” (初版〈復刻版〉)…………… 永島 剛 146
日本大学医学部同窓会編, 宮川美知子著
『醫の肖像——日本大学医学部コレクション——』…………… 渡部 幹夫 146
森川 潤 著『青木周蔵——渡独前の修学歴——』…………… 永島 剛 147

投稿規定	149
『中外医事新報』のウェブ公開に関するお知らせ	151
編集後記	151

《本号の表紙絵》

「野禮幾的爾之圖」

(天明7〈1787〉年 森島忠良編輯 紅毛雑話 卷之五 順天堂大学山崎文庫所蔵)

現代の世界において電気のない生活は想像もできない。しかし電気を人間が発電して制御して使用できるようになったのはそれほど古いことではない。電気のことの解り始めたころから、医の歴史の中ではそれを使うことがこころみられている。効果のほどは疑わしいが、そのころに、西欧社会では電気、磁気共に治療法に用いる一大ブームを起している。本号の表紙絵は森島忠良著『紅毛雑話』に載る野禮幾的爾之圖（ゑれきてる）である。その前丁にある『エレキテル』の部分の記述を昭和18（1943）年刊 長濱重磨著『ゑれきてる物語』河出書房により紹介する。

「先に家翁國訓法眼の友、後藤梨春が著す所の、紅毛談に出せる圖は、眞物を見ずして書けるなり。今左に圖する物は、家蔵のゑれきてるを圖寫したるなり。別に散圖を作て詳に説を記す。此器たるや、遠西の人、電光の理を究めて作り初たりといへり。翫器の中の最もめづらしむべき物なり。全圖の如く箱を居上に釣れる横筒に金糸を狭み、其端を床に座したる人に持しむ。扱紡車を廻す如く廻し、良有て火の取棒を、彼床に座したる人の躰にあつれば、所として火をださざる事なし。（燧して出る火の如しもとより人を焼べき物にあらず）近頃鵬翔公子、種々のエレキテルを新製したもう内、略式の物に至りては真鍮の横筒を竹筒に換、硝子車を、磁器の陶に替えて造り見るあり。去とも其用、本式の物に違ふ事なし。」

長濱の『ゑれきてる物語』によれば、[エレキテル]は羅匈名「エレキトリウム」または「エレキチイリタイト」などの訛轉なり。琥珀本力又元力ともいえる意にして……とあり、いわゆる静電気現象を表す言葉であった。

このような翫器の、和蘭甲比丹による江戸参府時の公儀への進献が安永3（1774）年、平賀源内の製作したのが安永5（1776）年とされている。奇器[人身の火をとりて病をいやす器なり]として今も郵政博物館等に残る。ライデン瓶の発明が1746年、ガルバニの接触電気の発見が1780年、ボルタの電椎及び電池の発明は1799年である。フランクリンの雷への凧揚げが1752年、同じフランクリンがアメリカ独立戦争中に合衆国独立宣言を起草したのは1776年である。電気物理学の金字塔であるファラデーの電磁感應（誘導）の発見は1831年のことである。

この図の3人の表情の愉しげな様子は同時代の江戸の賑やかさを伝えてくれるが、森島忠良は230年後の現代社会の電気や医療の世界をどのように予想していたのだろうか。

(渡部 幹夫)